

# 構想力と悟性の自由な戯れと価値創造 －文化としての建築創作論－

前田 哲男

山口県立大学附属地域共生センター

## Value Creation and the Free Play of Imagination and Understanding -Monograph on Architecture for Culture-

Tetsuo MAEDA

YPU Center for Cooperative Community Development

### Abstract

This research is an experiment that endeavors to constitute a theory by which architecture is created from aesthetics as exemplified in the works of Immanuel Kant, Kiyoshi Miki, and Gilles Deleuze. I think that the correlation between imagination, understanding, and reason is important. Although beauty is based on the elimination of desire, the sublime is accompanied by control of desire by reason. It is thought that the application of aesthetics, which respects diversity and the sublime, is equipped with a scope ranging from human rights to ideas for a perfect civil society.

Key words : Value creation, Architecture, Imagination, Understanding, Reason, Aesthetics  
キーワード：価値創造、建築、構想力、悟性、理性、美学

### 1. 序

建築創作論は自然科学、哲学、美学から構成される総合的な学問であると考えられる。ただ、建築創作論が総合的な学問であるということに対して賛同が得られても、建築設計に際して美学的知識が必要になるという主張に関して違和感を覚える人々も多い。地震や台風などの自然災害に対して人間生命や財産の安全を保証し、現代の地球環境問題を解決するためには、建築設計に際し、自然科学に基づく工学的知識の適切な利用が当然必要になってくる。また、社会における人々の自由な活動の舞台ともなる建築物は、建築設計の背景になる思想・哲学によって、そのあり方も大きく変化する。

このように、建築創作論が自然科学や哲学から構成されるということに対して違和感はないと思う。しかし、国や地域の活性化のためには美学よりも経済学の方がより重要で、美学は哲学の一分野であり、建築創作論は自然科学、哲学、経済学によっ

て構成されるという主張も考えられる。

上記のように、建築は芸術であり美学の知識も必要になるという主張が、現代日本社会において市民権を得ているとは考えにくく、自然科学や哲学に対して美学の位置づけが不確かで、この3者が相互にどのような関係にあるのかは不明確である。

しかし、現代社会を変革する新しい価値を創造しようとするとき、様々な判断や決断において美学の知識は重要な役割を果たすというのが筆者の立場である。芸術の世界にも商業主義が影を落としているが、本来の芸術は、人々の心を解放し、深く豊かな世界を創造するものである。また、建築デザイナーや技術者が、現代的課題の一つである、美しい自然との共生を目指したとき、彼らの抱く美意識や美学的判断能力は重要であると考えられる。そこで本研究は、美学という視点、特にカント、三木清、ドゥルーズの美学から建築創作論の一端を構成しようとする試みである。

## 2. カントと三木清

カント (1724-1804) は、「美的判断というのは、判断の規定根拠が主観的なものでしかあり得ないということである。」と『判断力批判』の冒頭 (第1部第1編第1章) から明確に語っている。たとえば黄金分割比に基づく完成されたプロポーションは美しいなど、美的判断の根拠を物体の色や形等の規則に見出すことが想定されるが、カントは美を生み出す色や形等の美的対象の規則 (規範) を初めから無視している。美についての判断は、美的対象の規則 (規範)、つまり概念に従って判断されるものではないという立場に立っている。そしてカントの美学の独創性は、美を感じているときの心の状態を見出したところにあり、それは、「自由に遊ぶところの悟性および構想力との調和」である。

三木清 (1897-1945) は『創造する構想力』において、カントの第三批判書すなわち『判断力批判』について、そこに登場する構想力の概念を拡張して捉え、カントの美学を継承し発展させようとしている。構想力には独自性と根源性がある。つまり、芸術の根柢や自然の根柢、さらに歴史的世界の根柢に構想力の論理があるという主張であるが、まず、生ける個人的な具体的な人間である「美的主観」に注目している。

私たちの一般的に不自由で没个性的な日常生活では、ある事業における経済効果の測定や利害損得の計算がしばしば登場してくる。また、私たちは倫理上の規範の意義や理由をそれほど深く考えようとはしていないが、「美的主観」とはどのようなものであろうか。「美的主観」とは、法則的自然科学の主観でも、規範的倫理学の主観でもなく、「美的領域においては人間は人間として、言い換えると、その個性、生命性、具体性において認められねばならぬ。カントの趣味論及び天才論の根柢にある美的主観はかくの如き具体的な主観である。」<sup>1)</sup>と、「美的主観」と自由で个性的な人間らしさを連動させ、つまり、理想的な人間像を重ねて語っている。

そして、美的主観が抱く趣味の問題は、趣味の批判の問題であり、批判は主観の独立性と自由を前提にする。それは、規則 (規範) の意味における美的概念の単なる適用でもなく、反対に、偶然的な現象を単なる統計調査結果に基づいて批判するものでもない。批判について「あらゆる批判の本質は、概念と経験との間に、普遍的なものの特異的なものとの間に、客観的なものと主観的なものとの間に、合理的なものとの非合理的なものとの間に存在している。」と語っている<sup>2)</sup>。

連続的に変化する世界の両極端は、両者の差異が拡大され、互いに対立するものになっている。そうした対立の中間に位置するということは、連続性を

考慮すれば、両者の性質を合わせ持つ両義性を構想力の論理では志向し、さらに、対立を乗り越え、克服してその両者を総合することを志向していると考えられる。

## 3. 構想力と悟性の自由な戯れ

カントの「構想力と悟性の自由な戯れ」について、三木は、悟性には自由な戯れというものがあつて得ないので「構想力の自由な戯れ」に注目し、「構想力の「戯れ」は規則の意識なしにしかも規則にあって、かくて悟性から導来されたのではないといえ悟性にあって働くのである。真の表現においては与えられた概念というものは存在せず、概念はむしろ生産的構想力によって図式の如きものとして表現過程の中から生まれてくるのである。生産的構想力は創造的であり、「無からの創造」という意味を有している。」<sup>3)</sup>と、構想力と悟性という二つの能力の調和以上に、構想力による無からの創造に力点の置かれた理解を表明している。

カントの見出した二つの能力の調和に関しては、共通悟性 (常識) ではない「共通感覚」や「目的なき合目的性」の記述において、カントの美学を継承している。さらにそれに加えて、「美的対象の構造についても何らかの合目的性が考えられ、しかもそれは目的なき合目的性の性格を有するのではなかろうか。」<sup>4)</sup>と語っているが、この点に関してはカントの立脚点を無視しており、疑問が残る。なお、後述するが、合目的性についての論考は、自然科学上の多様な法則の統一を論じる際に再度登場している。

三木にとって、美の判定よりも美の生産の方が重要である。二つの能力の調和以上に生産につながる構想力の論理の方が重要であった。しかし、カントの美学に登場する崇高に関して、三木は論考をしていない。なお、後述するが、崇高は生産の問題につながり、ドゥルーズ (1925-1995) はこの崇高に関するカントの論考を高く評価している。

そして、カントは彼の天才論のなかで「構想力と悟性の自由な戯れ」を再登場させているが、三木はそれが構想力の論理への発展の契機になると見ている。カントの天才論を論じる場面で、三木は、芸術の根柢、自然の根柢、歴史的世界の根柢に構想力の論理があり<sup>5)</sup> 天才の独創性は構想力に属する<sup>6)</sup>と主張し、「天才が自然として芸術に与える規則は、規則というよりも図式であるということができよう。」と語っている<sup>7)</sup>。

新たな独創的な価値の創造は、建築デザイナーや技術者にとって重要なテーマであると考えられる。三木にとっても独創的な価値の創造は、人間のすべての営みに関連する。道徳や倫理に関しても創造的

な世界があり、「道徳に習慣的な道徳と創造的人格な道徳との区別が認められるとすれば、後者の根柢に生産的構想力が考えられる如く、前者の根柢には再生的構想力が考えられるであろう。道徳も歴史的なものとしてかくの如きものであって、すべての歴史的世界の根柢には構想力の論理があるのである。」<sup>8)</sup>と語っている。構想力の論理は、美の判定の論理や認識の論理にとどまらず、創造的人格な道徳の世界を含んだ歴史的世界における生産の論理である。そして、カントの「構想力と悟性の自由な戯れ」について、心意の諸能力の調和以上に自由な戯れにおける心意の諸能力の躍動の方に注目している<sup>9)</sup>。三木は心意の諸能力の調和以上に、構想力の根源性や躍動した構想力による総合のはたらしの解明を志向していると考えられる。

しかし、カントは人間と欲望を切り離し、欲望の消去に基づく二つの能力の調和を見ている。私たちは自己実現欲、名声欲、金銭欲、食欲など様々な欲望を抱き、欲望が実現されたときは快感を覚える。美の判断においては、対象の存在や質料については無関心で、さらに快感によって美を判断するわけではなかった。カントは、欲望に乱されない平静な観照の状態にある心、つまり内発的な自己規律と自己制御の心を見ていると考えられる。カントにとって、心意の諸能力の躍動よりも、欲望の消去に基づく心意の諸能力の調和状態の発見が重要であったが、三木は躍動した構想力による創造の可能性をカント以上に踏み込んで論考しようとしていると考えられる。

#### 4. 同一性と類比

三木による構想力の論理は、多様なものが多様性において認められる類比の問題に関係づけられて、論考が展開されている。形式的論理学では「AはAである」という同一律という基本原理からその体系が構成される。そして、自然科学上の多様な法則の統一を論じる際に、その背景として、論理的合目的性の概念が登場する。この論理的合目的性について、「判断力批判における論理的合目的性の概念は、同質性、特殊化、連続性という三つの原理においてその論理的構造が明らかにされていると見ることができるであろう。」<sup>10)</sup>と、同質性、特殊化、連続性という三つの原理を抽出している。

類比は反省的判断力と同じように、与えられた特殊なものに対して一般的なものを見出す作用である。そして、「類比は多の中に一を求めることにおいてあらゆる論理と同じであるが、そのさい多を消し多を離れて一を求めるのではなく、多をそのまま認めながら多の中に一を求めるという点において特色を有している。」<sup>11)</sup>と、三木は、類比による異

種のものごとの統一、多様なものを多様性を維持したまま統一していくことに強い関心を示している。

歴史的世界の出来事として起こる人間の経験は、構想力の作用として捉えられる。そして、自然を記述する際に登場する有機体の根柢にも構想力の論理がある。この有機体については、「有機体はまず全体において形の同一性の原理を、次に諸部分において形の特殊化の原理を、更に全体と部分との相互的生産において形の連続性の原理を現している。」<sup>12)</sup>と語っており、有機体における構想力の論理を構成する要素としても、論理的合目的性の場合と同様に、同一性、特殊化、連続性を抽出している。

このように三木は、構想力の論理における創造の可能性を引き出すものとして、同一性だけではなく、特殊なものや連続性から登場する多様なもの、多様なものを多様性を維持したまま統一することに注目をしている。しかし、それはあくまで同一性を前提にしたものであると考えられる。

#### 5. カントとドゥルーズ

ドゥルーズはカントの三批判書を論考する前に、人間の心意の能力に関する用語を『カントの批判哲学』の序論で、つぎのように整理をしている。まず、直観、概念、理念が、表象の種類に対応した能力の区分である。また、受容性の能力として直観的感性、能動的な能力として、構想力、悟性、理性が存在する。さらに、『批判』一般の第一の問い（諸能力の上位形態とはいかなるものであり、これらの関心とは何か、そして何にむかうか）に対応する、認識能力、欲求能力、快もしくは苦の感情。さらに第二の問い（問題となる能力において、真に法則を定めるものは何か）に対応する構想力、悟性、理性である。

ここで、カントもドゥルーズも、認識能力において法則を定めるのは悟性であり、欲求能力において法則を定めるのは理性であると考えている。しかし、カントの『判断力批判』では、悟性の立法と理性の立法を結合させるものとして判断力が登場しているが、ドゥルーズは判断力ではなく、三木も注目した構想力を重視している。

ドゥルーズによると、反省的判断力だけではなく、規定的判断力つまり包摂という作用にも創意が含まれている<sup>13)</sup>。このことは『差異と反復』で展開されている、差異に否定を持ち込まず、差異をそのまま肯定しようとする主張に連動すると思われる。そして、判断力にはつねに複数の能力が含まれ、つぎのように、それらの能力の一致が表現される。「論理的判断力は、立法的悟性に即して対象を規定するところの、諸能力の一致を表現する。同様に、可能的な一つの行為が道徳法則に従属する一つ

の場合であるかどうかを規定するところの、実践的判断(力)なるものがある。これは理性の主宰のもとにおける、悟性と理性との一致を表現するものである。」<sup>14)</sup>

このようにドゥルーズに準拠すれば、判断力には複数の能力が含まれ、独立した能力を列記するときには相応しくない。快もしくは苦の感情において重要な役割を果たすものは、三木も注目した構想力ということになる。

ここでさらに、カントの美学をドゥルーズがどのように捉えているかを検討する。ドゥルーズは、美的概念の客観性には概念が伴ってなく、概念なしに美の判断は他者に対しても通用すると主張するカントの美学を了承し、その理由としても、カントの美学に登場してきた共通感覚に注目している。「ここにあるのは、自由な働きとしての構想力と無規定なものとしての悟性との間の一致である。つまり諸能力間の、それ自身自由で無規定な一致があるのである。この一致こそ、本来の意味での美的な共通感覚を定義するものであると、われわれはいわねばならない。」<sup>15)</sup>と心意の諸能力の自由にして無規定な一致について、ドゥルーズも注目している。

というのは、カントは共通感覚の種類を増したというのが、ドゥルーズの洞察であるからである。この共通感覚には美的共通感覚の他に、論理的共通感覚<sup>16)</sup>と道徳的共通感覚<sup>17)</sup>がある。認識能力における論理的共通感覚では、悟性の管轄下に他の諸能力が服し、また、欲求能力における道徳的共通感覚においては、理性の管轄下に他の諸能力が服しており、ともにある所定の能力の管轄下に他の能力が服すというかたちをとっている。しかし、美的共通感覚における心意の諸能力の関係は、無規定的で自由な調和である。そして、三種類の共通感覚の相互関係については、「美的共通感覚は、他の二つの共通感覚の仕上げをなすものではない。むしろそれはこれらを基礎づけあるいは可能ならしめるものなのである。」と整理している<sup>18)</sup>。

そして、欲望に乱されない平静な観照の状態にある心を前提とした美的共通感覚による美の判断を基礎として、崇高の判断が登場してくる。

## 6. 美と崇高

カントの『判断力批判』での論考では、美一般の形式的美学の後、崇高の非形式的美学が登場してくる。美の判断においては理性が関わっていなかったが、この崇高の判断においては理性が介入し、構想力と理性との調和によって、この判断が説明されている。

ドゥルーズはつぎのように、不一致という苦痛を伴う調和を特に注目している。「崇高は構想力と理

性との間の直接的関係に、われわれを直面させる。しかしこの関係は、一致であるよりも最初は不一致であり、理性の要求と想像力の能力との間に感ぜられる矛盾である。それ故、構想力はその自由を失うように見え、崇高の感情は快感よりむしろ苦痛であるように思われる。しかし不一致の底に、一致が現れるのである。それというのも、苦痛が快感を可能ならしめるからである。」と語っている<sup>19)</sup>。

このように崇高では、心意の諸能力が自らの限界に直面し、相互に暴力を行使し合う中から調和が登場してくる。理性と構想力の不調和のただなかから、相互の調和が産出されるという崇高の非形式的な美学は、多様なものを多様性を維持したまま総合して登場してくる独創的な価値、そうした価値の創造を可能にする仕組みを示していると考えられる。

美は心意の諸能力の調和によって美と判断される。その根柢には概念によるヒエラルキーの世界が横たわっている。また、概念の相互関係がつくる意味の配分の仕方も定定的であり安定している。このとき欲望を抑えておけば、構想力が自由になっても、様々な欲望の介入による判断の混乱はない。そして、こうした定定的で安定した世界の中で、包摂による規定的判断力の作用が登場し、それと自由な構想力とが調和をなし、反省的判断力の働きもあって美と判断することになる。

いっぽう崇高は、私たちの感性では計り知れない、永遠的で普遍的なるもの(超感性的基本法則)や無秩序(アナーキー)な状態と関係する。現実の時間や空間をはるかに超えた永遠で無限な世界は、現実の人間生活では経験することができない。しかし、そうした世界が存在しないと断定することはできない。また、その世界は無秩序であると想定されても、普遍的な法則に貫かれていないとは断言できない。無秩序な世界から普遍的な法則が発見される可能性を否定することはできない。

こうした崇高なものに出会う体験は、驚きから出発し、思考を強いられ、欲望を含めたあらゆる心意の諸力の動員が登場し、欲望の暴走や諸能力の不当な使用が登場する可能性もある。解放された構想力もたんなる夢想や幻想に陥る危険性もあるが、崇高においては、理性によるコントロールが発動している。

以上のように美は、欲望の意識的な消去に基づいているが、崇高では理性による欲望のコントロールを伴っていると考えられる。

ドゥルーズの『カントの批判哲学』での結論には「理性の諸目的」というタイトルがついており、合目的性に関する論考が展開されている。カントの『判断力批判』の意義について、「超越論的観点に対応し、立法の観念と完全に両立するような、合目

的性の新理論を提供したということこそ、本質的なことなのである。」<sup>20)</sup>と語っている。さらに、「合目的関係の創建は、完全な市民体制の形成である。これこそ「文化」の最高の対象、歴史的目的、もしくは厳密な意味で地上の最高善である。」<sup>21)</sup>というカントの主張を引用していることが注目される。私たちが合目的性を意識することは、自分自身の使命感を意識することに連動する。ドゥルーズもカントの美学を発展させ、合目的性の新理論の構築を図り、人権の尊重された完全な市民体制の形成を目指そうとしていたのではないかと思われる。

## 7. 芸術の記号と驚き

ある芸術作品を前にして、芸術作品を構成する記号の意味が汲み取れなく、むしろ驚きや戸惑いを感じることがある。こうした芸術の記号は、驚きや戸惑いから生まれてくる世界を準備し、純粋な喜びとともに、思考を突き動かす。

崇高と呼ぶにふさわしい芸術の記号を備えた芸術作品が存在する。そして、ドゥルーズは「崇高の感覚は、それが最高の合目的性を準備し、ほかならぬわれわれ自身に道徳法則の到来の心構えをさせるといって、われわれのうちで産出されるのである。」<sup>22)</sup>と語っているが、芸術の記号により強制される思考こそが、より深く、あるいはより高い精神に達しうる可能性があると考えられる。

美に付き添っている関心について、社会的関心と理性の関心を区別することが大切である。私たちは利害損得の計算に基づく関心などの、経験的で社会的な関心によって美を判断しているわけではない。そして、崇高には理性の関心が加わり、理性の関心である理念は、永遠的で普遍的なるもの（超感性的基本法則）と関係し、これがクローズアップされたとき、それは芸術作品の命になると考えられる。

個々の現象を概念で整理し判断することは、個々の現象が持つ微妙な差異を無視することである。そしてそのことは、私たちの経験自身が、概念や社会的関心に適合した形でしかなくないことを意味している。私たちは、こうした現実の様々な概念や社会的関心への囚われから抜け出して芸術の記号に接するとき、その芸術の記号のおかげで世界が多様化するのを見ることが出来る。そしてこの体験は、概念による悟性の思考が作るヒエラルキーに基づく定住的世界とは別世界の体験である。

## 8. 同一性と多様性

ドゥルーズは『差異と反復』の特に第三章「思考のイマージュ」で、同一性と表象＝再現前化を批判している。これは、カントの『純粹理性批判』等に対する批判であり、「『批判』の本領は、せいぜい

のところ、自然法則の観点から考察された思考に世俗の状態を与えるということにしかない。カントは、共通感覚を増やそうと、そして、理性的思考の自然的な関心と同じ数だけ共通感覚をつくらうと企てる。」<sup>23)</sup>と語っており、ひび割れた自我を見つめようとする立場から、共通感覚による現象の理解の仕方を批判している。ただ、諸能力の不調和的調和に関しては肯定的で、「カントこそ、崇高なものにおいて行使される能力としての構想力と思考との関係のケースにおいて、そのような不調和による調和の範例を示した最初の人である。」と語っている<sup>24)</sup>。

悟性による認識と論理的思考は、同一性と表象＝再現前化に基づいている。ドゥルーズによると表象＝再現前化は、同一性、対立、類比、類似の4つの主要素からなる<sup>25)</sup>。そして、私たちは一般的に、オリジナルはコピーに対して優位であると考えている。オリジナルである原型や祖型そのものの同一性を尊重する伝統が、強く存在している。さらに、シミュラクル（見せかけ）はコピー以上に軽視されている。こうした伝統の源泉は、プラトン哲学にあるとし、「プラトン哲学は、すみずみまで、「ものそのもの」ともろもろの見せかけ（シミュラクル）を区別しなければならないという考えによって支配されているのだ。」と語っている<sup>26)</sup>。

そして、優劣や否定に差異を利用せず、差異そのものを肯定し、差異と反復との一体性を確立しようとしたドゥルーズは、このシミュラクルを浮上させようとしている。

三木は構想力の論理を構成する要素として、同一性、特殊化、連続性を抽出していた。そして、三木も多様性つまり差異に注目していた。しかし、特殊化や連続性によって、差異を思考しているようには見えても、ドゥルーズの主張を踏まえれば、その差異は同一性に従属している差異であると考えられる。三木は差異を抜こうとして、差異そのものを直接扱っていないと考えられる。

日常生活において、私たちは建築の経験を反復している。その経験の反復を子細に検討すれば、そこには様々な差異を伴っていることが分かる。反復された経験がまったく同一であるということは、とても息の詰まる生活を営んでいることであり、私たちは日々の日常生活において、多様な発見がある。

原型、祖型を尊重し、原型からの距離を計測して類型を位置づける発想は、構想力の自由な世界を拘束するものであると考えられる。現実には変化し、変転している。それは固定状態ではない。言葉でそれを写す原型として同一性が存在しているわけではない。絶対に変化を排斥する同一性は、実在の原則としてはなんら意味を持つことができないと考え

られる。

ドゥルーズの主張のように、同一性は生産のプロセスの途中で生まれる一つの結果であり、反復が差異を伴わずになされることはない。差異を差異として思考し、そのまま肯定することは多様性を尊重することに連動すると考えられる。そして、こうした多様性をそのまま尊重する美学の応用範囲は、人種や人権問題から完全な市民体制の形成まで、広い射程を備えていると考えられる。

## 9. 結論

人間の心的能力を構想力、悟性、理性と分類することにどれほどの意義があるのだろうか？心をその要素に分解して理解し、それで終わるのではなく、生きた根源的な連関において把握する必要がある。三木は、新しい価値を創造する可能性のある構想力に絶大の関心を寄せ、構想力によってこの連関を理解しようとし、歴史的世界の根柢には構想力の論理があるとした。確かに構想力は、悟性によっては認識されないものを感じようとするとき、つまり、形なきものの形を見、声なきものの声を聞こうとするとき、重要な働きを示し、それは機械的な日常生活を乗り越え、創造的生産活動へ導くものであると考えられる。

しかし、解放された自由な構想力は暴走し、不当に利用される可能性もある。そうした事態を阻止するのが悟性であり理性である。特に理性は欲求能力に関しての上位の能力であり、理性の叫びは良心の叫びである。

欲望を乱さない平静な観照の状態にある美の判断以上に、崇高の判断は、多様性が尊重された独創的な生産の世界の契機になる可能性がある。また、理性の関心である理念は、永遠的で普遍的なるもの（超感性的基本法則）と関係し、優れた芸術作品と共鳴する。

美学は単に哲学の一分野ということではなく、哲学の根柢に、構想力と悟性の自由な戯れから発展する美学がある。この美学は建築創作論の根柢にもあり、同時に、人種や人権問題から完全な市民体制の形成まで、幅の広い射程を備えていると考えられる。

## 註

- 1) 三木清：創造する構想力、燈影舎、京都（2001）、p.321
- 2) 三木清：前掲書、p.323
- 3) 三木清：前掲書、p.329
- 4) 三木清：前掲書、p.334
- 5) 三木清：前掲書、p.337
- 6) 三木清：前掲書、p.338

- 7) 三木清：前掲書、p.339
- 8) 三木清：前掲書、p.340
- 9) 三木清：前掲書、p.343
- 10) 三木清：前掲書、p.353
- 11) 三木清：前掲書、p.365
- 12) 三木清：前掲書、p.372
- 13) ジル・ドゥルーズ：カントの批判哲学－諸能力の理説、中島盛夫訳、法政大学出版局、東京（1984）、p.92
- 14) ドゥルーズ：前掲書、p.93
- 15) ドゥルーズ：前掲書、p.77
- 16) ドゥルーズ：前掲書、p.33
- 17) ドゥルーズ：前掲書、p.56
- 18) ドゥルーズ：前掲書、p.78
- 19) ドゥルーズ：前掲書、p.80
- 20) ドゥルーズ：前掲書、p.109
- 21) ドゥルーズ：前掲書、p.117
- 22) ドゥルーズ：前掲書、p.81
- 23) ドゥルーズ：差異と反復、財津理訳、河出書房新社、東京（1992）、p.214
- 24) ドゥルーズ：前掲書、p.227
- 25) ドゥルーズ：前掲書、p.215
- 26) ドゥルーズ：前掲書、p.114